様式 C-7-2

自己評価報告書

平成２３年　５月１３日現在

機関番号：３２４１５
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2008～2011
課題番号：２０５９２６０３
研究課題名（和文）　双生児と母親との母子関係形成プロセスに関する研究

研究課題名（英文）　A Study of the mother-infant relation process on twins and a mother

研究代表者
布施　晴美（FUSE HARUMI）
十文字学園女子大学・人間生活学部・准教授
研究者番号：００２２７５０５

研究分野：看護学
科研費の分科・細目：看護学・生涯発達看護学
キーワード：双子、母子関係、育児ストレス

１．研究計画の概要
(1)目的：本研究では、双子とその母親との関係性の形成過程について、その特徴と構造を明らかにし、その関係性を促進あるいは阻害する因子を探索することを目的としている。
(2)意義：現在母子相互作用や母子の愛着形成に向けての研究が様々な角度から行われているが、双子と母親との３者の関係において焦点をあてて、母子相互作用を追跡し分析した研究は国内外においても非常に少ない。双子は虐待の危険因子の一つに挙げられていることからも、本研究を進めていくことは、双生児家庭への支援を検討するための基礎資料となると考える。
(3)方法：双子家族を新生児期から 18 ヵ月まで追跡する縦断的事例研究および因子探索研究を行う。

２．研究の進捗状況
(1)双子の母親の母乳育児に対する認識
①概要：事例研究で関係性の促進・阻害因子を探索するにあたって、双子の母乳育児と愛着の関係を把握するために、双子の母親への母乳育児に対する認識について質問紙調査を行い、単胎児の母親と比較した。
②結果：双子の母親の母乳イメージは「苦痛・負担因子」が単胎児の母親より顕著に高いことが示された。双子の母親の母乳育児については、母乳の良さは認識しているが、母乳信仰にとらわれないことで、母親のストレスを軽減していた。母乳育児だけが愛情や絆ではなく、それにとらわれず育児を楽しむことが大切と感じていたことが示された。
(2)双子と母親との育児経過における母親の認識
①概要：初産の双子家庭（健康な同性の双子、核家族）の母親を対象とし、質問紙調査および家庭訪問（ビデオ撮影）によりデータを収集する。新生児期から 18 ヵ月までを３ヵ月ごとに追跡調査をする。調査項目は、母親の対児感情、母親の精神健康(GHQ)、母性意識、育児困難感、母子相互作用等とした。
②これまでの結果：
１～12 ヵ月までの追跡結果を途中経過として報告する。母親の GHQ については、生後 1 か月の時点で、身体的症状、不安･気分変調、睡眠障害がみられ、3 ヵ月の時点では身体的症状が軽度みられるのみと改善したが、12 ヵ月では一般的疾患傾向が顕著に現れ、身体症状も変わらず軽度見られていた。
母性意識は１ヵ月時点と比較して、３ヵ月以降は肯定的な点数が高くなり、否定的な点数は低くなってきている。一方で育児困難感の点数は３ヵ月で低値となったが、12 ヵ月では上昇がみられている。母親は生後間もなくから２人の特徴を把握している。双子と母親との関係性は、双生児間での偏りが３ヵ月頃から見られ始め、9 ヵ月ではその差は少なくなるが、双生児間で逆転することはなかった。母親は子どもの成長発達とともに、育児に慣れ、育児を楽しむようになってきているが、一方で子どもの成長発達合わせて育児が変化してくることに伴い、母親の中で様々な感情が出現してくることも見出せた。

３．現在までの達成度
④遅れている
(理由)研究協力者のリクルートが思うよう

に進んでいないため遅れている。その理由として、倫理審査委員会（２か所）で承認を得るのに時間を要したこと、新型インフルエンザの流行により協力病院の立ち入りの制限があったこと、設定した研究対象者が少なかったことが考えられる。

４．今後の研究の推進方策

研究協力者のリクルートを進めていくためには、事例提供のための研究協力病院を増やすことであり、現在交渉にあたっている。また、事例研究を進める傍ら、同じ変数を用いて、横断的な研究を検討する必要があると考える。

５．　代表的な研究成果

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

<u>布施晴美</u>：双子の母親の母乳育児に対する認識、十文字学園女子大学人間生活学部紀要、査読有、7 巻、489-199、2009 年.

〔学会発表〕（計１件）

<u>布施晴美</u>：双子の母親の母乳育児に対する認識、第３回乳幼児保健学会、2009 年 10 月 24 日、広島市.